

# 春燈

11 月号

November 2010



主宰の句

安立公彦

たまゆらの帰燕のみ空澄雄逝く

温め酒わが青春歌古びけり

竜胆や浅間へ径の細りゆく

折りとりし芒にけふの旅をはる

秋遍路世の外の日を背に負ひ



久保田万太郎の句

# 獺に燈をぬすまれて明易き

『流寓抄』昭和三十年

「船津屋とは『歌行燈』に描かれたる湊屋のことなり。主人念願の記念碑のためにつきの一句をおくる」と前書がある。船津屋は木曾三川（木曾・長良・揖斐）が合流して伊勢湾に注ぐ辺り『桑名の渡し』にも近い。句碑は白壁造りの一部に納められている。が、万太郎独特の細字が殆ど読みとれなくなっている。自然石の風化によるものか。船津屋の獺の消息はいまのところ聞いていない。

富山 俊雄

久保田万太郎の句

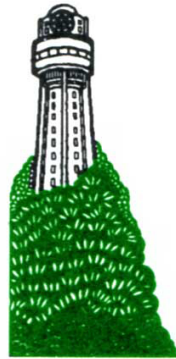
# 東京へ出なくていゝ日鷓鴣

『春燈抄』昭和二十年

「十二月二日―日曜、しかも快晴、心、はなはただ和む」の前書がある。戦禍に遭い鎌倉への転居を余儀なくされ、超満員の電車に辟易していた頃の句である。鷓鴣が小さな体の尾を立てて、ちよこまかと活発に飛び回り、好天を無心に楽しむ姿を見ると心が浮き立つ。「出なくていゝ日」の言葉に、思うまま行動できる休日への期待感、解放感が溢れている。

中島節子

# 燈下集



○ 金山雅江

秋声夫妻出合ひの家や合歡の花(小石川三句)  
えんまの鐘叩きてよりの秋の風  
文人歌人の旧居あまたや昼の虫  
ふる里の色町ぬけて墓参り  
古書店の電球ゆるる初嵐

○ 太田佳代子

包丁の切れ味澄める今朝の秋  
手の中に来てすぐ去りて秋の風  
ひとときは厨に秋の日の射せり  
米ひとつこぼさず研ぐや星月夜  
流星や叶はぬ思ひ日にいくつ

○ 荻野嘉代子

土用鰻香りいただく老舗かな  
科博館に竜涎香聞く夏休み  
ラピスラズリのスカラベしかと夏逝かず(エジプト展)  
はなまきの九月の風や「どつどつ」と  
東御苑盗人萩も伺候せる

○ 佐々木良玄

迎へ火は吾が背送り火はあなたの背  
水飲めば足るさびしさの初盆供  
涸川の橋渡る人孤独めき  
私も影も汗ふく炎暑かな  
灼くる町行方知れずの老人達

○ 久保久子

空蟬の四肢に気負ひの残りけり

ありつたけの沢風入るる河鹿宿

白波の岩食む月日晚夏光

潮の香をふくむ漁船や秋暑し

落し水罅に帰る鳥の影

○ 廖 運 藩

鬼月や寺観忙しき鉦太鼓(注||鬼月は「施餓鬼の意」)

鬼月や香華遽かに無縁塚

白服や昔佩劍の鬼巡査

虫眼鏡斜に構へて穀象捕る

薄命の淡粧愛し月下美人

○ 中村春宵子

キューポラの丈それぞれに大西日

鎮魂の雲流るるや原爆忌

語り部の学徒の顔に敗戦日

胸襟の開く湯あみや涼新た

花火終へ何時ものまどみ戻りけり

○ 渡邊泰子

語らねば消ゆる昭和の蟻地獄

学徒散り埋もる詩歌や夏の果

明日あらば遺書とはならじ敗戦日

秋暑し刑場跡の平和の碑

雲の峰目差す球児のホームラン

○ 生方義紹

かき氷ふと口を衝く尺貫法

香水の風頬をなづ石畳

夏の雨酒場の隅の荻須の絵

褻の日々やのうぜんかつら散りにける

十階に独り酌みぬる裸かな

○ 久米憲子

会ひたくて声聞きたくて茄子の馬

樟大樹つくつく法師鳴かせけり

蠅螂や器用に生くる術知らず

版画展出て絡み付かれし残暑かな

夕かなかな抜け道一つ違へけり

# 当月集

安立 公彦選



○ 川崎真樹子

マグマの赤映しカンナの燃えにけり

稲妻やジグソーパズル終のピース

父母の墓洗ひそちらの暮し訊く

施餓鬼会の講話に伊曾保物語

生者死者なひまぜにして踊の輪

○ 清水美子

蝸や母の簞笥の香袋

言の葉のやはらぐ誰り秋の風

母のもの身に着け後の更衣

色なき風心を染むる夕まぐれ

相伝の木地師の鑿や菊日和

○ 片山博介

暗闇にとよむ佞武多の大太鼓

眉上げて出陣近し武者佞武多

鮮やかな彩撒き散らし佞武多の夜

しづまりて跳人の鈴の闇に散る

夜半の雨佞武多の熱をさましけり

○ 小山繁子

流灯や百の祈りを百の燭

捨案山子母を待つごと田に伏せり

赤とんぼ笑顔日に日にもどる母

秋入日けふの影濃き廃校舎

星月夜端山はるかに寝ねずけり

○ 矢口笑子

七星のひとつは地球天道虫

悪役に徹し切れない秋の蛇

一笑に付して枝豆つまみけり

艶話とぼけて躲す秋扇

新涼や楽屋暖簾の水浅葱

# 春燈の句

安立 公彦選

めぐり来てまた新たな原爆忌

新刊の書に初秋の匂ひあり

露けしやしぱらく寄りぬ松の幹

白桃の水に打たれて光りをり

夏惜しむしまふ鞆に鈴の音

店先の高値の秋刀魚睨み行く

広ぐれば鈴の音する秋扇

盆用意祖母の手順を守りけり

猫脚の白きテーブル涼新た

己が身の二つ三つ欲し秋の雲

生身魂わが家が良しと宣へり

家中に草の香の満つとろろ汁

冷酒酌む青き切子や夕爾の忌

夜の秋や三角定規の丸き穴

東京 小林 リン

東京 横山 さくら

千葉 西岡 啓子

広島 藤村 達江

カーテンのかすかにゆるる今朝の秋

新涼や木曾は馬籠の檜笠

新聞に未だ猛暑の大見出し

などかくも炎帝荒び給ふなる

新田を古絵図に探る秋ともし

客人に一叢残す芒かな

蝉の殻ちからをぬくをまだ為さず

秋立つと帯をきつめに締上げし

一の鳥居すいととび越す鬼やんま

爽気満つ絵には描けぬ空の色

空蟬の前世は知らず吹かれをり

幕間の闇ながかりし村花火

かなかなや看取の膳の上げ下げに

無住寺や居留守決めこむ蟻地獄

神奈川 石田 康明

千葉 海村 禮子

岐阜 富永 真代





# 余言

安立公彦

ひつそりと秋の来てゐる草の丈

三上 程子

秋草は日本の詩歌の、或るときは主役となり、あるときは脇役として、その詞藻を豊かに彩つて来た。

この句、古今集巻四の良く知られた、「風の音にぞおどろかれぬる」を聴覚の捉えた「秋」とすると、まさしく、視覚に映る「秋」の訪れの句である。

今年の暑気は、残暑となつても一向に衰えを見せなかった。そういう中にも、しかし「秋」は確実に訪れて来る。「ひつそりと」が、一句をよく支えている。

子別れの鴉鳴きつつ暮れにけり

浅野 洋子

めずらしい季語だ。主季語は「別鳥」。傍題に、「鴉の子別れ・秋の鳥」がある。解説を見ると、「鴉は親子の情愛が深いが、陰曆七月になると必ず母子の別れがあると言われている」と

し、樗堂の、八田の縁や追ひ崩さるる秋鴉の例句を載せている。樗堂は一茶と同時代の俳人。

この句、作者の追憶か。ひたすらの寂しさが惻々と伝わって来る。加餐を祈るのみ。

一刷けの雲の夕焼夕爾の忌

井上 春子

夕爾忌は八月四日。昭和四十年没、五十歳。今にして思えば早世と言えよう。

木下夕爾は俳人であると同時に優れた詩人として知られていた。「その詩が純粹なようにその俳句もまた純粹だった。その詩が清新なようにその俳句もまた清新だった」は、『定本木下夕爾句集』の跋に寄せた安住敦の一文。

「一刷けの雲の夕焼」は、まさに夕爾の詩の世界だ。この句を見て、久しく手にしなかった夕爾詩集、夕爾句集を開いた。懐かしく心ゆたかなひと時だった。

安達太良山の夕日の空や合歡の花

西谷 良樹

安達太良山、標高一七〇〇米。この山の名は、私たちを『智恵子抄』の世界に誘う。

深田久弥は、『日本百名山』の中で、「二本松から眺めた安達太良山、それを歌った高村光太郎の詩が、この山の名を不朽にした。」と書いている。

作者も今、同じ場所からこの山を仰ぎ、その思いを深くしているのだろう。その思いは一句の調べにたゆたっている。添景の合歡の花が印象的だ。

生かされて仰ぐ空ありいわし雲

松本 俊介

「生かされて」が切実だ。「仰ぐ空あり」が、その切実さを更に深める。作者は昨年来重篤な病床にあり、十数時間に及ぶ手術を良く克己して、いま静かに快癒への道を歩んでいる。幸い病いは着実に平癒していると聞く。それは同時発表の、〈復調のこれも証か秋渴き〉に見る通りだ。また〈内々の快気祝や初さんま〉の句も、ことさらな鯛などでなく「さんま」が、作者の手柄を良く表わしている。

振舞水ハーブの香りただよはせ

宮田 豊子

この季語も今ではめずらしい。夏の盛り、道ばたや木陰に冷した水を置き、通る人が自由に飲めるように茶碗を添えていたという。その水を「振舞水」と言う。

この句を見て、今年五月の関西大会を思い出した。大垣駅に近い八幡神社の境内に湧き出る「自噴水」は、さしずめ旅人にとつては「振舞水」だったのだろう。作者はその水に、「ハーブ」の香りがしたとして、この季語を現代に呼び戻している。古い季語を良く活性化した句だ。

父母の墓洗ひそちらの暮し訊く

川崎真樹子

発想がいい。〈掃苔やありし日のごとかしづける 阿部みどり女〉という句があるが、作者の句はそこから数歩飛び出して、「そちらの暮し訊く」の前に、表現としては、「洗ひとともに在ることし」が来、その語らいの中に、「そちらの暮し訊く」と付くのが一般だ。作者の句はその踊場を飛び越している。しかし一句はこれで良い。

俳句の新しさは、感性の新しさに通じる。それは年齢を問わない。もとより、確とした有季定型の覚悟を基本とすることは言うまでもない。時は秋彼岸。

秋入日けふの影濃き廃校舎

小山 繁子

生徒の数がなくなった地方では、使われなくなった校舎を、別の用途に再利用している所があると聞く。この句の校舎は、しかし以前の校舎のままに残っている。何れは解体されるのであろう。

作者は或る秋の夕暮れ、その校舎を前にする。或いはこの廃校舎は、作者の昔通っていた小学校か。例えそうでなくても、「廃校舎」にはさまざまな過去が籠る。その思いを、「けふの影濃き」と表現したのは正解だ。平易な言葉を使って、しかも思いの深い句にしている。